

# 寄り添う人は利他的か？

○井川純一<sup>1</sup>・中西大輔<sup>2</sup>・中川裕美<sup>2</sup>・志和資朗<sup>2</sup>・井前田和寛<sup>3</sup>・井河野喬<sup>4</sup>

(<sup>1</sup>大分大学 <sup>2</sup>広島修道大学 <sup>3</sup>比治山大学短期大学部 <sup>4</sup>広島文化学園大学)

## 目的

「寄り添い」という用語が教育・医療福祉現場で多用されている(前田他, 2014)。「寄り添い」のイメージに着目した先行研究では、「寄り添い」を使用することによって、支援が失敗した場合でも、援助者にネガティブなイメージが付与されないことが示されている(井川他, 2015)。このことは、「寄り添い」という言葉が支援がうまくいかない場合の免罪符として利用されている可能性を示唆する。つまり、「寄り添い」は表面上の言葉のみで使われており、実際の援助行動に結びついていない可能性がある。そこで、本研究では寄り添いと実際の援助行動の関係について検討するため、寄り添い尺度(暫定版)を作成し、学生を対象とした囚人のジレンマゲーム(以下、PDゲーム)により、「寄り添いを重視する」者が協力行動をとる傾向にあるかどうかを検討した。

## 方法

**予備調査** 介護職112名(男性27名,女性85名,平均年齢46歳)から具体的な「寄り添い」のエピソードを収集し、KJ法及び集中討議により10項目の寄り添い尺度(暫定版)を作成した。

**手続き** 大学生(男性54名,女性55名,平均年齢18.75歳)を対象に質問票に回答させた後、1回限りのPDゲームを施行した。質問票は、性別、年齢などの個人属性に加え、就職希望「あなたは将来、対人援助職(心理、教育、医療、福祉など)として働きたいと考えていますか?(6件法)」を測定した。また、寄り添い重視傾向を測定するため、寄り添い尺度(6件法)を「あなたが対人援助職として働くとしたら、どのような態度でクライアントに接すると思いますか?」と教示して使用した。

**協力行動の指標** PDゲームでは、最初に200円の元手を実験参加者に渡し、200円のうちのいくらかを匿名の他者(実際には存在しない)に提供するかを10円単位で決定させた(提供した金額は2倍になって相手に渡る)。このゲームは1回限りであり、提供しないほうが参加者の利益となるため、分配額を協力行動の指標として使用した。

## 結果

寄り添い尺度(暫定版)は因子分析(最尤法プロマックス回転)を行い、負荷量の小さい質問項目を3項目削除し、1因子構造を採用し( $\alpha=.78$ )、寄り添い重視得点(因子得点)を算出した(Table 1)。

Table 1

寄り添い尺度(暫定版)

1. クライアントに優しい言葉かけを心がける
2. クライアントと一緒に悲しんだり、苦しんだりする
3. クライアントの話を受容的に聴く
4. クライアントの気持ちに共感する
5. クライアントと同じ視線で接する
6. クライアントに常に笑顔で接する
7. クライアントの意思を尊重する

性別を統制し、就職希望、寄り添い重視、協力行動の偏相関をそれぞれ算出したところ、就職希望と寄り添い重視には正の相関( $r=.22, p<.05$ )が認められたが、協力行動と寄り添い重視傾向は無相関であった。

## 考察

寄り添い重視と就職希望に正の相関が認められたことから、対人援助職を希望するものが「寄り添う」姿勢を重視する傾向にあることが示された。一方、寄り添い重視と協力行動は無相関であった。このことは、「寄り添い」を重視する人がコストをかけて他者に利他的に振る舞うとは限らないことが示唆された。

本研究は学生を対象とした実験のため、対人援助職にとっての寄り添いと意味合いが異なる可能性がある。今後、Web調査を用いて寄り添い尺度(完全版)を作成し、対人援助職の実際の援助活動との関連について検討する必要がある。

## 引用文献

- 井川純一・中西大輔・前田和寛・河野喬・志和資朗(2017) 対人援助職の「寄り添い」が印象形成に与える影響: 場面想定法実験を用いた予備的検討, 広島修大論集, 57, 163-169.
- 前田和寛・中西大輔・井川純一・河野喬・志和資朗(2014). 流行語としての「寄り添い」: 新聞記事のテキストマイニングによる探索的研究, 日本社会心理学会第55回大会発表論文集, 68.